

ICT を活用した子ども理解を深めるための記録のあり方

—保育・幼児教育現場における実習記録の様式と指導の課題—

A Study on Records Using ICT for Better Understanding Children

— Issues of format and guidance of practice records in early childhood education—

影浦 紀子・山口 真美・三好 冬馬⁽¹⁾・吉野 亜祐美⁽¹⁾

Noriko KAGEURA, Manami YAMAGUCHI, Toma MIYOSHI, Ayumi YOSHINO

(心理子ども学科子ども専攻)

要 約

本研究の目的は、ICT を活用して子ども理解を深めるための実習記録の様式と実習指導の在り方について検討することである。

本論文ではまず、実習記録における実習生と現場の課題・問題状況と近年の保育現場における ICT 導入の現状について整理した。次に「教育実習 I」の松山東雲学園附属幼稚園観察実習を事例として、記録の改善を目的とした協働実践研究を実施し、その経過と学生の変容を記述した。そこでは、実習前後で実習記録に関する不安が減少したことが明らかになった。最後に、保育現場における ICT 化の現状と課題をふまえて、保育・幼児教育現場における実習記録の様式と指導の課題について考察した。

キーワード：実習記録, ICT, 子ども理解

[Abstract]

The aim of this paper is to examine the better format and guidance of practice records using ICT for understanding children in early childhood education.

We reviewed the issues of practice records between students and supervisors, the current state of ICT introduction in recent years in the childhood education and childcare. We then conducted a practical study at the kindergarten attached to Matsuyama Shinonome College to develop better records. Analysis of two surveys of students who had experienced teaching practice in the kindergarten was discovered that students' concerns about practice records have decreased.

Keywords: practice records, ICT, understanding children

1. はじめに

保育者養成大学における実習記録は、保育者としての知識、技術を身につけるための重要な媒体である。しかし、実習生にとっては、この実習記録を「書くことが大変」であると言われる。とくに初めて現場に出る実習生は、次々に目の前で繰り広げられていく出来事をただ茫然と眺めるのに精いっぱいである。その中で子どもと関わったり指導者からの指示された仕事をしたりしていると、メモをとる余裕もなく、自宅に帰ってから実習記録を書こうとしても、何をどのように書けばよいかかわからず、時間がかかってしまい、寝不足になったという声もよく耳にする。また、記録が目的になってしまい、実習中に子どもと関わるよりもメモを多くとることに一生懸命になってしまう実習生もいる。しかもこのように苦労して書いた実習記録が、その後の実習や指導計画や保育実践に役立ったという声も聞かれないのが現状である（植原，2005）。

提出される実習記録を見る実習指導担当者にとっても、後進を育てたいという思いや自身の保育を振り返る機会と前向きにとらえて指導する一方、保育の現場では通常の業務、書類の多さで多忙を極めてるのが現状である。実習生の指導、とりわけ実習記録の添削は少なからず負担となっている（山本，2022）。

大阪府私立幼稚園連盟は、こうした状況を解消するために、実習記録を記録としてだけでなく、実習指導者と実習生が対話をするための資料としての役割に注目し、記録様式の開発を行っている（大阪府私立幼稚園連盟，2020）。

本来、実習記録は、保育を文字化することによって気づきや学びを「見える化」することが目的である。それは、観察した実習生にとって意味があるだけでなく、保育の場に携わる人たちが共通の情報を得ることができるという意義がある。とりわけ、事例については、子どもを多面的に理解するための重要な資源であるはずである。

そこで、本研究は、ICTを活用することによって、実習生と現場の保育者の負担を軽減しつつ、子ども理解を深めるための実習記録の様式の開発と実習指導の在り方について検討することを目的とした。まず、実習記録における実習生と現場の課題・問題状況と、現在、保育者養成機関で用いられている各種実習記録の様式について先行研究をもとに整理する（2節）。次に、保育現場におけるICT導入の現状と課題について明らかにする（3節）。そして、2023年度心理子ども学科子ども専攻専門科目「教育実習Ⅰ」における松山東雲学園附属幼稚園観察実習を事例として、実践研究を行った結果を報告する（4節）。最後に、保育現場におけるICT化の現状と課題をふまえて、保育・幼児教育現場における実習記録の様式と指導の課題について考察する（5節）⁽²⁾。

2. 先行研究の整理

2. 1. 実習記録における実習生と現場の課題・問題

実習記録における実習生と現場の課題として次の4つがあげられる。

(1) 記録が目的になってしまう

まず、記録が目的になってしまうことである。「実習生は全ての時間と行動を逐一書かなければならないように感じ、記入することに一生懸命になってしまい……読み返した時に、何気ないことばかりが記載されていて、重点がわからなくなる」、夜中まで実習記録を書いて寝不足になってしまう、実習中「日誌が書けないのでメモを多くとらなきゃいけない」と考えて記録のためのメモをとることに一生懸命になってしまう、添削されたものの訂正に追われてしまう(山本, 2022)といったように、「記録のための記録」になっている場合がある。あらゆる場面で新鮮で書きたい場面がたくさんある、逐一書かなければならない、たくさん書かなければ良い記録ではないと思いつんでいる、実習指導担当者から文章表現についての修正や要求が多いなどの問題がある。

(2) 書くことが苦手

次に、実習経験のなかで心動かす場面はあるが、何をどのように書けばよいかわからない、言語化できないという場合である。文章表現に対する苦手意識だけでなく、正解を求めてしまう傾向も影響していると考えられる。

一方、実習経験においてまったく心を動かすことができていることが原因で、書くことができない場合もある。増田ら(2023)は、そのような学生でも質問によって「掘り下げていくと、次はそういうところに着目するようにはなる」と述べている。また、実習による緊張や不安、ただ眺めるのに精一杯ということも考えられるだろう。

(3) 誤字脱字など文章能力の問題

3つ目は、文章能力の問題である。誤字脱字は、誰にでも起こりうることだが、とりわけ対人関係に困難さがみられる実習生の困りごととして「指導案や記録の書き方がわからない」(80.2%)、「読み取りにくい字を書く」(60.5%)と高い割合であった(服部ほか, 2023)。大阪府私立幼稚園連盟も指摘しているように「日誌の指導に熱が入るあまり、初日から多くの修正・訂正を行うことで、実習生の意欲を下げる」こともある。誤字脱字や日本語表現のおかしさといった表記レベルの指導内容は、実習生にとっても実習指導担当者にとっても負担になってしまっている。

(4) 「対話」の重要性

(1)(2)については、実習の前、実習中の実習生と実習指導担当者との対話によって回避できると言えるだろう。そして「対話」の重要性を養成校と実習園とが共通理解するための「対話」も必要である(大阪府私立幼稚園連盟, 2020)。無藤も指摘しているように「指導者と実習生が1対1では、どうしても指導者が正答になってしまう」(増田ほか, 2023)。対話の際には、「反省会」として実習生が反省点を述べて指導や助言をもらうという一方的な指導では実習生が自ら気づくこ

とはできない。そうではなく、「同僚性を尊重した、自由感のある雰囲気の中で、実習記録に基づき、実習生と指導者たちとの対話」の時間の確保が必要である（増田ほか，2023）。さらには「対話がどのような意味をもたらすのについて、さらに詳細な検討が必要」であると言える（岩田ほか，2019）。

2. 2. 実習記録の様式

現在、保育者養成校の実習において使用されている実習記録の様式には、主に、①時系列型、②エピソード型、③ドキュメンテーション型がある。従来の記録は、①と②を組み合わせた形式が多く、③は近年、保育現場において活用されている写真を用いた記録、評価であり、実習にも活用されつつある。それぞれの実習記録の目的と課題について整理した（表1参照）。

(1) 時系列型

子どもの活動と保育者の動きを時間に添って記録するタイプである。保育者の仕事を学ぶ、園の保育の流れを見ることが目的となる。一斉活動の際の記録としては向いているが、子ども一人ひとりの遊びや様子をとらえるのには不向きである（山本，2022）（増田ほか，2023）。

(2) エピソード型

各場面での子どもの動きや保育者の動きを一体のものとしてとらえることや、焦点化して子どもたちの様子を見る、焦点化して保育の活動の意味を考えることにつながりやすいと言える（増田ほか，2023）。しかし、「保育の様々な事象や場面の中で、どこを切り取るのか」「どう記述し、振り返るか、その視点の獲得は実習生だけでは難しい」と言えるだろう（山本，2022）。

(3) ドキュメンテーション型

ドキュメンテーション型記録は、イタリアのレッジョ・エミリアのドキュメンテーションやニュージーランドのラーニングストーリーといった記録の考え方の影響が大きい⁽³⁾。ドキュメンテーション型記録の利点として、「子どもの遊びのおもしろさ」に気づきやすくなる、子どもの姿をめぐって保育者と実習生が対話することで「共に考えるという関係性が生まれてきやすい」（岩

表1：実習記録様式と特徴と課題

種類	目的	課題
時系列型	保育者の仕事を学ぶ、園の保育の流れを見る、一斉活動の際の記録	子ども一人ひとりの深い理解には不向き
エピソード型	子どもや保育者の活動を一体として捉える、それらの意味を理解する	どこを焦点化するか（撮影するか）視点の獲得が難しい 文章表現への苦手意識
ドキュメンテーション型	子どもや遊びの面白さに気づきやすい 対話によって共に考えるという関係性が生まれやすい	どこを焦点化するか（撮影するか）視点の獲得が難しい 撮影のための媒体の問題

田ほか, 2019)。一方で、「意図する場面はなかなか撮れない」ことも指摘されている。増田ら(2023)によると、「撮れないことが実はいいこと」であるという。つまり、「自分がとった写真から見ているようで見えていない」ことが分かってくる、「思いつきで撮るだけではだめなことに気がつく」という。これは、エピソードを書く時と同様で、どこを切り取るか(撮影するか)、その視点の獲得の難しさは共通であると言える。

近年、保育現場の記録や評価の変化もあり、養成校、園ともに、実習記録を見直したり新形式の記録の作成が行われたりしている。

3. 保育現場における ICT 導入の現状

3. 1. 保育現場における ICT 導入の現状

2015年から、国は保育業務支援システムの導入に補助金を交付し、これを契機にICTシステムの採用が増加している。また、新型コロナウイルスのパンデミックにより、デジタル技術の利用がますます不可欠となり、その導入が加速している。当協会が2023年4月に行った「保育現場でのICT活用の実態調査」によると、全国の公立保育施設のICT化率は約36%であった。

ICTを導入した施設に対する調査(こどもDX推進協会, 2023)では、「ICT導入により業務改善が実現した」との回答が約8割あり、その効果が明確とされている。

令和6年度からは、保育施設におけるキャッシュレス決済のICT化を支援するための補助金交付が計画されており、各自治体では協議会の設立が検討されている。また、国も保育施設が扱うデータベースの標準化やデジタル技術を活用した給付および監査の運用を計画し、保育現場がICTを活用した業務運用への移行を推進している(内閣官房, 2023)。

このように、保育のICT化は現場の要望と国の政策により今後も進展し、導入施設および利用される機能がさらに拡充されると考えられる。

3. 2. ICT の活用例

(1) 登降園管理

保育施設では、在籍している子どもの登園・降園状況を管理し、職員間で共有されている。昨今の登降園にまつわる事故をうけて保護者への速やかな確認と職員間における情報共有の徹底が求められている(こども家庭庁, 2023⁽⁴⁾)。

かつては、多くの園でノートやホワイトボード、マグネットシールなどを使用して管理されていたが、これらの方法では迅速で正確な管理が難しいという課題があった。

ICTを活用することにより、保護者が玄関に設置されたタブレットで出席を記録し、登園児とその時間をリアルタイムで各クラスに設置された端末で確認できるようになった。また、欠席情報も保護者アプリから提供され、各職員が容易に確認できる。

職員間での情報共有の必要性が軽減され、連絡ミスの発生を防ぎつつ、登降園情報を効率的に管理できるようになった。

(2) 保護者との情報共有

施設と保護者との間のやり取りは、多岐にわたるものである。保育者は、日々の保育の進捗、必要な物品（例えば着替え）の連絡、子どもたちの日常的な体調や定期的に測定する身長・体重のデータなどを保護者と共有している。また、施設全体としては、園だよりや献立表、行事のお知らせ、アンケートなども含まれる。保護者からは、子どもの欠席連絡や体調不良、送迎時間の変更などの情報や、子どもに関する相談も随時受け付けている。

とくに朝の登園時間帯には、保護者からの電話による欠席連絡、口頭での伝達、連絡帳、前日からの引継ぎ事項など、多くの連絡が保育施設に届く。これらの情報を保育者が確認し、共有し、適切な箇所に記入する必要があるが、漏れなく処理することが求められる。さまざまな工夫が各現場で行われているが、伝達ミスや記入漏れなどの問題を完全に排除することは難しい。

ICTの導入により、保護者とのコミュニケーションは基本的にスマートフォンアプリを介して行われるようになる。施設側としては、朝の電話が大幅に減少し、子どもや保護者との対話に充てる時間が増え、保護者は夜間でも施設に連絡できるようになり、利便性が向上する。コミュニケーションはICTで記録され、各端末で確認できるため、情報共有の必要がなくなり、物理的な伝達ミスも防げる。ICTを活用することで、保護者とのコミュニケーションにおける誤解や情報漏れを防ぐことができる。

ICTを利用して保護者との情報共有を進める際、保護者と施設の関係性が希薄になるリスクもあるが、ICTを活用することで保護者と子どもの日々の様子を共有し、写真や動画を通じて施設の雰囲気や保育者の思いを伝えることができ、逆に保護者との関係性を強化する手段となることが期待される。

(3) 保育の計画と記録

令和元年に実施された厚生労働省の調査では、記録と計画など保育士が作成する書類の多さや内容面での重複が指摘されている（厚生労働省、2020）。書類作成にかかる業務時間を短縮し、保育者の負担を軽減するためには、書類の様式や記載方法を見直したり工夫することが考えられる。

保育においては、記録と計画などの書類が、その施設の保育の質に直結するものであるため、安易な削減だけを目的とすることには危険性が伴う。子どもの実態に即した指導計画に注力できる環境整備が求められている。

ICTを活用することで、作成にかかる時間や労力を削減し、システム内の機能連携により重複作業を軽減できる。たとえば、日々の保育の記録を園内や保護者との情報共有として活用することも可能である。とくに保育の質向上に向けては、ノンコンタクトタイムの重要性が注目されており、そのような時間を確保するためにも、書類の見直しと効率的な作成が不可欠である。

書類を自宅に持ち帰って作成するケースも少なくないが、情報セキュリティや職業倫理を鑑みる

と、適切な情報の管理も保育現場が果たすべき重要な役割である。保育に関する記録と計画のデータを適切かつ効果的に管理するためにも、ICTは非常に重要な役割を担う。

(4) ドキュメンテーションを活用したカリキュラム・マネジメント

保育に関する記録の点で、ドキュメンテーションが注目されている。ドキュメンテーションとは、写真を活用した保育記録のことである。子どもの姿や成長を文章だけで正確に記載することは、時間もかかり、スキルも要求される。写真にコメントを添える形の記録にすることで、作成の負担を軽減し、視覚的に理解しやすい記録を作成できる。

ドキュメンテーションを活用することにより、作成の負担を軽減するだけでなく、保護者や施設内での保育の共有、子どもへの遊びの共有にもつながる。作成することにより、保育者自身が視覚的に保育を振り返ることができ、そこから次の保育計画の作成へとつながるサイクルが生まれる。さらにそれを職員間で共有することで、子ども理解を深めるための対話が生まれる。そのように、施設全体としてドキュメンテーションを軸にしたカリキュラム・マネジメントを行うことにより、子どもの姿に即した保育を行う環境を作ることができる。

現在、ドキュメンテーションが日本で急速に広がっているが、定着して活用している施設はごく一部にとどまっている。その大きな理由の一つは作成の負担が大きいことである。前述のように、保育者は多くの書類を作成しており、それに加えてドキュメンテーションを作成することは非常に難しい。ICTを活用することにより、業務の負担を軽減しつつドキュメンテーションを作成することができる。ドキュメンテーションを作成することで、保育日誌や個人記録となり、保育の計画や保護者への発信に役立ち、その体制を構築することが可能である。

(5) 請求・集金

平成27年から始まった国の「子ども・子育て支援新制度」により、子ども一人ひとりに1号から3号の教育・保育給付の認定が行われている。施設によって異なるが、一人ひとりの「教育標準時間」「保育標準時間」「保育短時間」の管理が求められている。多くの施設では、利用時間を超える場合に延長保育料が発生し、保護者に請求される。つまり、子ども一人ひとりの日々の登降園の時間を記録し、集計・請求・集金の業務が行われている。

前述したように、ICTの導入により、登降園のデータから自動で延長時間の集計やそれによる請求額の計算が可能となり、保護者が直接スマートフォンで決済を行うことも可能なシステムがある。

保育施設では、これ以外にも様々な給付申請を行っているが、ICTのデータを活用することによって大幅に業務負担を軽減することが可能となっている。

(6) 労務管理

保育施設において、職員の勤務状況や労働時間の適正な管理が重要である。保育者やその他職員の勤怠記録、残業時間、休暇の取得状況などを正確に把握し、労働基準法などの法令順守を確保する必要がある。また、職員の健康管理やワークライフバランスの促進も、労務管理の重要な要素で

ある。

ICTの導入によって、これらの労務管理業務の効率化が可能となっている。タイムカードシステムやクラウドベースの勤怠管理システムを活用することで、勤務時間の正確な記録やデータ管理が容易になり、業務負担の軽減が実現している。また、これらのシステムを通じて、職員自身が自分の勤務時間や休暇取得状況を確認できるため利便性も向上している。

さらに、適切な人員配置や労働時間の調整が可能となり、職員の負担軽減や労働環境の改善につながる。労務管理のICT化は、保育施設における効率的かつ健全な労働環境の構築に不可欠な要素である。

3. 3. まとめ

保育現場でのICT導入は年々進展しており、保育を取り巻く環境の変化と共にその重要性が高まっている。国の保育関連制度の変更が進行中であり、それに伴い保育現場のデジタル化も進んでいる。この状況の中で、ICTの活用は保育の質と効率性を向上させるために不可欠である。ICT導入により、保育者の業務負担は軽減され、子どもたちの発達記録や日々の活動を効率的に追跡し、保護者とのコミュニケーションもスムーズになる。これらの進展により、保育現場におけるICTの導入は、今後も保育の質の向上と業務の効率化を実現する重要な手段として、さらに重要な役割を果たしていくことが期待される。

4. 実習記録の改善に向けた実践研究

4. 1. 実践研究の概要

本節では、前節までの実習記録における実習生と現場の課題を踏まえ、保育現場におけるICT導入の現状を鑑みたうえで実施した研究の概要と結果を報告する。具体的には、影浦・山口が所属する心理子ども学科子ども専攻の「教育実習Ⅰ」内の松山東雲学園附属幼稚園での観察実習において、実習先（附属幼稚園）と有識者（保育ICT推進協会）との協働を通して、実習記録の改善を目的とする実践研究を行った。研究は以下の流れに沿って2023年度に行われた。

表2：研究の流れ

9月1日	保育ICT推進協会との協議①
10月10日	学生への事前アンケート調査の実施
10月13日	保育ICT推進協会との協議②
10月30日	附属幼稚園との協議①
10月31日	実習記録の作成方法について学生に説明

11月7日 ～12月8日	教育実習Ⅰ 附属幼稚園観察実習 (3日間×5週間に分けて実施)
12月1日	附属幼稚園での観察調査の実施①
12月8日	附属幼稚園での観察調査の実施②
12月19日	学生への事後アンケート調査の実施
12月22日	附属幼稚園との協議②
2月(予定)	保育ICT推進協会との協議③

本学において教育実習Ⅰは3年次後期の開講科目であり、保育実習Ⅰを終えた学生が受講している。実習前の協議の結果、実習記録の内容・方法を次の点で変更した。まず、これまでは紙媒体の実習記録に手書きで記入していた形式を、完全にオンライン化した(学園アドレスのGoogleドキュメントで作成し、Googleドライブで共有)。共有の範囲は、実習生(学生)と教育実習Ⅰ担当教員、および附属幼稚園の園長、実習指導担当の教諭、実習生の配属クラスの担当教諭とした。次に、3日間の実習のうち、時系列型(日誌)の作成は1日のみとした。また、事例(エピソード記録)は1～2日目に3つ書くこととした。ただし、考察部分については次の日までに完成していなくても可とし、その代わりに、2日目以降の反省会において事例1つについて担当教諭と対話を通じて考察を深めたうえで完成させることを指定した。

実習前後には、学生の実習記録に対する認識とその変化を明らかにするために、Googleフォームを用いて学生にアンケート調査を実施した。本稿ではこのデータの分析を行う⁽⁵⁾。調査では、2節1項の整理を踏まえて実習記録に対する認識10項目(①夜中まで実習記録を書いて寝不足になってしまう、②実習記録のためのメモをとることに一生懸命になってしまう、③実習記録は、たくさん書かなければ良い記録ではないと思う、④実習指導担当者からの修正や要求が怖い、⑤実習中、心を動かす場面はあるが、何をどのようにかけばよいかわからない、⑥実習中、緊張や不安などで心を動かす場面が思い出せない、⑦実習記録の誤字脱字、日本語表現のおかしさといった表記レベルの指導を受けることが多い、⑧実習指導担当者との反省会(質問・相談する時間)は、安心して対話できる時間である)を、それぞれ4件法(1. とても当てはまる～4. 全く当てはまらない)で尋ねた。すなわち、数値は⑧を除き、点数が高いほど肯定的な結果ということになる。また、このほか、⑧の理由と実習記録に関する疑問・不安・困っていることについて自由記述で回答を求めた。回収率は事前：94.9%(N=37)、事後：89.7%(N=35)であった。分析にはSPSS Statistics Ver.28.0を使用した。

4. 2. 学生アンケートから見る実習記録に対する不安とその改善

本項では、実習前後の2つのアンケート調査結果を比較することで、実習を通して学生の認識の変化の有無を検討する。

まず、事前の調査結果の集計からは以下の通り、実習記録に対する不安が概ねどの項目においても大きいことが察せられた（とても当てはまる・当てはまるの合計）。

- ①夜中まで実習記録を書いて寝不足になってしまう：83.8%
- ②実習記録のためのメモをとることに一生懸命になってしまう：56.8%
- ③実習記録は、たくさん書かなければ良い記録ではないと思う：67.6%
- ④実習指導担当者からの修正や要求が怖い：51.4%
- ⑤実習中、心を動かす場面はあるが、何をどのように書けばよいかわからない：75.7%
- ⑥実習中、緊張や不安などで心を動かす場面が思い出せない：45.9%
- ⑦実習記録の誤字脱字、日本語表現のおかしさといった表記レベルの指導を受けることが多い：29.7%

また、実習記録に対する不安について、事前の調査結果から項目間の関連を探った（表3）。相関分析を行ったところ、①と②・⑤・⑥・⑦、②と③・④・⑤・⑥・⑦、③と④、④と⑤、⑤と⑥にそれぞれ中～強程度の相関が見られた。つまり、修正や要求を恐れていることとメモに必死になっていること（④と②： $r=0.678$ ）、あるいはメモに必死になっていることと（それにも関わらず）書くべきことがわからないこと（②と⑤： $r=0.563$ ）、修正や要求を恐れていることと書くべきことがわからないこと（④と⑤： $r=0.592$ ）等、それぞれが関連しており、悩む学生は多くの共通したポイントに不安を抱えていることが確認できる。また、②メモに関しては⑧を除くすべての項目において相関があるという結果になっており、記録に対する不安が実習中にとにかくメモをとらなければいけないという行為やプレッシャーにつながっている可能性が指摘できる。なお、⑧対話については不安に関する項目ではないが、2節1項（4）で述べたように対話により不安が軽減することも考えられるため分析に含めたものの、4分の3（75.0%）が実習前においても肯定的に評価しており、他の項目との有意な関連も今回は得られなかった。

表3：実習記録に対する不安の相関係数

(n=37)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
①寝不足	/	—	—	—	—	—	—	—
②メモに必死	.490**	/	—	—	—	—	—	—
③たくさん書かなければいけない	.091	.470**	/	—	—	—	—	—
④修正や要求が怖い	.408*	.678***	.362*	/	—	—	—	—
⑤何をどのように書けばよいかわからない	.482**	.563***	.214	.592***	/	—	—	—
⑥緊張や不安などで思い出せない	.507**	.412*	.214	.374*	.404*	/	—	—
⑦表記レベルの指導	.171	.424**	.178	.039	.150	-.179	/	—
⑧反省会での安心した対話	.043	-.069	.187	-.274	-.043	.041	-.087	/

*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

次に、実習前後における実習記録に対する不安の変化量を比較した。手続き的には、Shapiro-wilk検定による正規性の検定結果を踏まえ、Wilcoxonの符号付き順位検定を用いた。有意水準は5%とした。

表4から、すべての項目において有意な変化が認められる。すなわち、①～⑦の不安については改善（「当てはまらない」と回答する傾向）、⑧においてやや改善（「当てはまる」と回答する傾向⁽⁶⁾）したと解釈することができる。とくに変化量が大きいのが、⑦表記レベルの指導と①寝不足の減少である。今回の実習記録の改変の結果、ICT活用を進めたことにより、漢字の誤記や表現の不備が減少したこと、実習記録の作成時間が短縮されて実習中の睡眠時間が確保できたことが推測される。

表4：実習前と実習後の実習記録に対する認識比較

(n=35)

	実習前			実習後			z値	p値
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値		
①寝不足	1.60	0.775	1	2.91	0.919	3	4.652	0.000 ***
②メモに必死	2.31	0.932	2	3.29	0.789	3	4.143	0.000 ***
③たくさん書かなければいけない	2.29	0.710	2	2.83	0.618	3	3.396	0.000 ***
④修正や要求が怖い	2.31	1.105	3	3.34	0.765	3	4.423	0.000 ***
⑤何をどのように書けばよいかわからない	1.91	0.781	2	2.74	0.852	3	3.634	0.000 ***
⑥緊張や不安などで思い出せない	2.57	0.778	3	3.29	0.667	3	3.895	0.000 ***
⑦表記レベルの指導	2.74	0.741	3	3.66	0.539	4	4.815	0.000 ***
⑧反省会での安心した対話	1.97	0.870	2	1.31	0.471	1	-3.247	0.001 **

Wilcoxonの符号付き順位検定：*** p<0.001, ** p<0.01

最後に、今回の実習記録に対する学生の自由記述からさらなる改善点に言及したい。記録の総量が他の実習に比べて少なかったことで、記録の作成へのプレッシャーや負担を感じずに、子どもとの関わりに集中したり楽しむことができたりした等の肯定的な意見が大半を占めた。改善点として挙げられたのは、「何を最後提出しなければならないかが、分かりにくかった」「電波の繋がりが悪いところでは入力出来なくなったり、入力した内容が消えたりするのは少し困った」の2件であった。前者については大学側の実習担当者の指示不足、後者については学生の情報環境の整備という課題であると考えられる。

5. 保育・幼児教育現場における実習記録の様式と指導の課題

以上より、保育現場におけるICT導入は、国の政策を背景に、安全管理、情報共有、労務管理から、保育の計画・記録などカリキュラム・マネジメントに関わる部分にまで活用、進展してきている。

これらの流れを受けて、本研究において取り組んだ実習記録の完全オンライン化は、実習記録の課題（記録を書くことが目的になってしまう、書くことが苦手、文章能力の問題）を克服し、実習生の実習記録における負担を軽くすることができた。その結果、子どもとの関わりに集中し、充実した実習時間を確保することができたと言えるだろう。今後の課題として、以下の3点が挙げられる。

(1) 実習現場の受け止め

今回、実習記録の課題と保育における ICT 導入の現状を踏まえた実習記録の ICT 化が中心となり、実践研究に協力していただいた実習現場の受け止めを明らかにすることができなかった。実習記録が ICT 化することで、実習指導にどのような影響があったかを明らかにすることは今後の課題である。

(2) 実習指導担当者との対話の在り方についての検証

今回、実習記録の負担が軽減された背景には、実習指導担当者との対話も影響していたと考えられる。とくにエピソード型記録について実習指導担当者と対話することで、内容に対する自信が生まれ、書かねばならない記録から「書きたい記録」にすることができていたのではないかと考えられる。今後、実習指導担当者との対話の内容や方法、環境などの詳細な分析が必要だろう。

(3) 子ども理解の深まりを評価する指標（ルーブリック）の開発

今回、実習記録への負担軽減から子どもとの関わりに集中することができたものの、そこから、子ども理解が深まったかについては十分な検証をすることができなかった。エピソード型記述欄に追加した子ども理解のためのアシストの有効性や、学生が書いたエピソード記述における子ども理解の深まりを検証、評価する必要があるだろう。とりわけ子ども理解が深まったかどうか、評価するための指標については、ICT ルーブリックを用いた研究もある（尾崎，2020）。今後、保育現場と協力しながら、子ども理解の深まりを評価する指標の開発を手掛けていきたい。

付記

本稿は、保育 ICT 推進協会との共同研究「ICT を活用した実習日誌様式の開発」の成果の一部である。研究にあたっては令和 5 年度中・四国保育士養成協議会教職員研究費（研究テーマ：保育 ICT 化に伴う実習日誌共有モデルの構築に関する協働の実践研究）と 2023 年度松山東雲こども教育実践研究センター研究助成金（研究題目：ICT を活用した子ども理解を深めるための記録のあり方）の助成を受けている。また、本研究は松山東雲女子大学「人を対象する研究倫理審査」の承認を受けて実施されたものである。

注

(1) 一般社団法人 保育 ICT 推進協会

(2) 1・2・5 節は影浦，3 節は三好と吉野，4 節は山口が執筆を担当した。

(3) ドキュメンテーションとは、『幼児学用語辞典』によると「イタリアのレッジョ・エミリア市の公立幼児学校において、ドキュメンテーションは、幼児の協働的な学びを可視化するツール、保育者の省察とカリキュラムの生成を促す情報源、親や地域住民の教育参加を促す通路として機能しており、いわば質の高い保育を支える強力な道具として位置づけられている」とあり（小田豊・山崎晃監修『幼児学用語集』北大路書房，2013 年）、保育におけるエピソード記述をはじめ、幼児の発言メモ、録音記録、デジタルカメラやビデオカメラを用いて幼児の活動の様子を撮影した記録など、「保育に活用されている様々な記録に対する総称」である（上田，2019）。しかし、近年では、保育、幼児教育現場で古くから用いられてきた時系列型やエピソード型の記録と対照的に、視覚的な記録として写真記録をドキュメンテーション（保育ドキュメンテーション）と表現することが多い（岩田ほか，2019）。

- (4) 本件は各都道府県・市町村保育主管課等への事務連絡である。文書は公益財団法人児童育成協会の企業主導型保育事業ポータルウェブサイト (<https://www.kigyounaihoiku.jp/>) から入手した。
- (5) 実践的協働研究の全容や実習反省会の観察調査の結果については別稿に譲る。
- (6) なお、事後調査においては、全員が肯定的回答を示した（とても当てはまる：68.6%，やや当てはまる：31.4%）。これは今回の附属園での指導が学生にとって安心できるものであったことを示しているが、実習記録の様式やその指導方法に起因するものかについては留意が必要である。

引用・参考文献

- ・大阪府私立幼稚園連盟、『大阪府私立幼稚園連盟実習ガイドライン』，2020年。
- ・岩田恵子，大豆生田啓友，鈴木美枝子，田澤里喜，田甫綾野，「『ドキュメンテーション型実習日誌』の試みと課題」『玉川大学教育学部紀要』第19号，pp.125-140，2019年。
- ・上田敏文，「子どもを理解するための方法としてのドキュメンテーション」，入江礼子・小原敏郎編著，『子ども理解の理論及び方法』萌文書林，pp.96-109，2019年。
- ・植原邦子編著，『やさしく学べる保育実践ポートフォリオ』ミネルヴァ書房，2005年。
- ・尾崎司，「現場連携による実習評価ルーブリックの開発（Ⅲ）—実習のためのアセスメント・システムの構築に向けて」『東京家政大学研究紀要』第60集（1），pp.105-122，2020年。
- ・厚生労働省，「令和元年度 保育士業務の負担軽減に関する調査研究 事業報告書」，<https://warp.dandl.go.jp/info:ndljp/pid/12862028/www.mhlw.go.jp/content/000636458.pdf>，2020年（2024年1月18日確認）。
- ・こども家庭庁，「こどもの出欠状況に関する情報の確認の再徹底について」，https://www.kigyounaihoiku.jp/wp-content/uploads/2023/09/20230912_01_saitettei.pdf，2023年（2024年1月18日確認）。
- ・こどもDX推進協会，「保育施設のICT導入効果に関する調査レポート」，<https://drive.google.com/file/d/1dqwWWuAmpkDdEBDRDeEfbE323jP0aUfdB/view>，2023年（2024年1月18日確認）。
- ・内閣官房，「子育て・児童福祉分野におけるデジタル行財政改革の方向性（デジタル行財政改革会議（第3回）こども政策・少子化対策・若者活躍・男女共同参画担当大臣提出資料）」，https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/digital_gyozaikaikaku/kaigi3/kaigi3_siryou6.pdf，2023年（2024年1月18日確認）。
- ・服部伸一，井上寿美，廣陽子，半田結，「対人関係に困難さがみられる保育実習生に関する全国調査」『関西福祉大学研究紀要』第26巻，pp.65-73，2023年。
- ・増田まゆみ（監修・企画），尾崎司，石井章仁，那須信樹，小櫃智子，無藤隆，「特集 保育実習の新たな挑戦—記録に着目して」『保育ナビ』第14巻，第6号，pp.10-23，2023年。
- ・山本房子，「幼稚園教育実習日誌の実際」『中国学園紀要』第21号，pp.11-20，2022年。